



10/10

ただいま一、昨朝無事に帰国しました。出発前のコメントありがとうございました。

参加者18名の中で一番の年寄。
成田←→リスボン全線KLMで行きも帰りもアムステルダムでの乗継ぎ6時間弱。
覚悟はしてましたがやはり疲れしました。

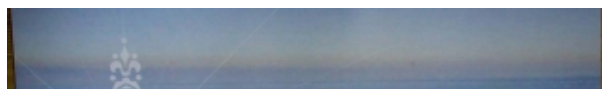
ポルトガルのいくつかの旧市街をバスで回る旅行でしたが
思っていたよりも楽しめました。

今までイギリスとその他の西欧諸国（例えばフランス、ドイツ、スペインなど）
との時差は1時間あるのは知っていましたが、ポルトガルもイギリスと同じで
1時間の時差があることを初めて知りました。いまはまだサマータイムなので
日本ーポルトガル8時間、日本ースペイン7時間の時差です。

同行のガイドさんがバスで北スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラから
Vigoを通して国境のミーニョ川の橋（川の真ん中が国境とのこと）を渡り
ポルトガルに入った時に時計を1時間遅らせてください。と
今日は1日が25時間になりますよ！」だって。得したような気分。(#+.#)
（行きは23時間、損したのかな 笑）

約40年前にマルセイユからフランス郵船の貨客船で横浜まで1ヶ月かけて
帰国しましたが、乗船前にリベリア半島を列車で回り、リスボンに1日
立ち寄った事があります。去年の北欧旅行と同じく「ベレムの塔」と
写真の「発見のモニュメント」は懐かしい対面でした。
これもそのうちホームページに載せる予定です。

いつも6時前に目が覚めるのに今朝は9時過ぎまで寝ちゃいました。





10/11

写真はCabo da Roca(ロカ岬)で(事前に連絡し)発行してもらった最西端証明書です。

リスボンから約40km離れたところにあり、巨大なユーラシア大陸の西の果て。
北緯38度47分、西経9度30分、高さ140mの断崖の上に、ポルトガルの詩人
カモンイスが詠んだ、詩の一節を刻んだ石碑がボツンと建っている。

「AQUI・・ONDE A TERRA SE ACABA E O MAR COMEÇA--ここに地果て、
海始まる」大西洋からの風を受けて岬の突端に立つと"地の果て"を実感します。



10/12

今回のバス旅行であちこちで目にしたのが上薬を使って焼かれたアズレージョと呼ばれる焼タイルで覆われた教会や修道院、宮殿、その他の建物の壁、床、天井など。
写真はAveiroの旧駅舎の壁です。ここは青色単色ですが多彩色も多かったです。

この芸術は15世紀にムーア人からスペインを経由してポルトガルにもたらされ、
多くのタイルにおいてアラビアの影響を受け、組み合わせる曲線が幾何学的であったり
花のモチーフを使用したりで、やがて多彩色の上薬をかけて焼かれたタイルなど
技術は進歩しポルトガル史の歴史的、文化的要素を記録して現在に継承されてきた。





10/13

写真はAveiro市内の中央運河に浮かぶモリセイロと呼ばれる小舟です。
極彩色の絵で美しく飾られていて、とても印象に残った小舟でした。

Aveiro市はAveiro川の河口に位置する水郷都市で小ヴェニスとも呼ばれ
入り組んだリア（潟）が内陸に大きく食い込んでおり自然の良港と
して繁栄してきた。

モリセイロは元々田畑を肥沃にする肥料として使用された入り江の
海草(molico)をすくい集め、その運送に使われていた。
彼らは海草を食べる習慣はなかった。

「モリセイロ舟」はモリーソ＝海草を語源とする。
しかし、川の汚染により肥料としての海草は徐々に消滅し現在、
モリセイロ舟はAveiro市内を流れる運河に浮かび、観光客を
乗せる観光用になっている。



10/14

写真はリスボンのオウリヴェザリア・ダ・モーダ；1906年創業の宝飾店の
ショーウィンドウに飾られているポルトガル伝統の金銀細工
Filigrana（フィリグラナ）の船です。とてもきれいでしょ。

フィリグラナとは、銀を薄く延ばし、細い糸のようにして
編みこんだものや金銀の針金や小玉を使用して細工された貴金属品のことです。
フィリグラナはポルトガルの伝統工芸品のなかでも最も歴史あるもので
ヨーロッパで色々な国にありますがポルトガルが本家本元だそうです。

金細工(19.2金)、銀の土台に金を被せたもの、そして銀細工の3種あり、すべて熟練の職人さんの手で丹精こめて仕上げられています。

この店の階下に販売カウンターがありツアーで参加の女性方がペンダントやブローチ、指輪など安いものは15€ぐらいからあるそうで熱心に見て回っていました。購入された方もいたでしょう。

因みにこの船の値段をひやかし半分に店の主人にたずねたら、2750€(約38万円)と値札を見せてくれました。



10/15

ポルトガルは日本の4分の1程度の国土に15もの世界遺産があります。
今回のバス旅行でその内6ヶ所の世界遺産を巡りました。
今後1ヶ所ずつご紹介していきます。

<その1> ポルト地区

リスボンから北へ300km、ドウロ川北岸の丘陵地に築かれた起伏の多い街。
坂の多さは「7つの丘の街」と呼ばれるリスボンにも劣らない。
人口約23万人、ドウロ川河口に位置するポルトガル第二の都市。
この国の商工業の中心地として栄えてきた。

ドウロ川の南岸はローマ時代にカーレCaleと呼ばれる州であった。そして港Portusの役割をもっていたので、ポルトウス・カーレと呼ばれていた。
これがポルトガルの語源だ。

ローマ帝国の衰退後、西ゴートの時代を経て、8世紀に支配権はイスラム教徒に移る。11世紀、そのイスラム教徒から国土を取り戻したフランス貴族がいた。彼はその報酬としてドウロ川とその北のミーニョ川に挟まれた地域を与えられ、その地名からポルトカリア伯爵と呼ばれた。
ポルトガルにフランスからブドウの苗を持ち込んだのも彼だ。

ポルトガルの国土はポルトカリア伯爵の息子で初代ポルトガル国王となるアフォンソ・エンリケスの進軍によって南に広がり現在の大きさになった。
つまり、名実ともにポルトガル発祥の地がここポルトというわけだ。
1415年にはエンリケ航海王子の指揮のもとポルトを起航した船が北アフリカのセウタを攻略。ヨーロッパの他国に先駆け大航海時代の先陣を切ることとなった。

もうひとつ忘れてはならないのがポートワイン。

南岸にはワインセラーが並び、かつてワインを運んだ帆船がドウロ川に浮かんでいる。（地球の歩き方より）

上の写真はその南岸より寫したものです。すぐ後ろにはSandemanのポートワイン工場があります。今回工場内部を見学し、試飲も行われました。



10/16

世界遺産その2 アルコバサ サンタマリア修道院

アルコバサはポルトガル中部、ナザレの東14km、アルコア川とバサ川が交わる場所にある町。ここにポルトガル初代の王アフォンソ1世がレコンキスタに功のあったシトー派修道会(シトー会)に感謝して1153年この地にサンタ・マリア修道院を建立。

ポルトガル最大の修道院で正面の幅が221mもある。ゴシック様式のシトー派修道院の傑作であるが、正面は18世紀にバロック様式に改築された。シトー会の精神を反映した修道院内に悲恋の主人公ペドロ1世と女官イネスの棺が礼拝堂に安置されていることでも知られる。修道院は1989年に世界文化遺産に登録された。1153年に建設がはじまり1222年に完成、その後も歴代の王によって増改築、最盛期には約1,000人の修道士が暮らし自給自足を旨とする。彼らは戦いで荒廃した周辺の土地を肥沃な農地に変貌。この台所と食堂を見学した。台所は18m高の煙突、食堂は皆四方とも壁に向かって座って無言で食事をし、太ったら狭い隙間があり、そこを通り抜けできるかチェックする箇所もできていた。

アルコバサを流れるテージョ川はヨーロッパの川幅14kmあるとのこと。

レコンキスタ；国土回復戦争

中世後期のイベリア半島におけるキリスト教徒とイスラム教徒との戦い。

スペイン語でreconquista（再征服）と呼ぶ。

イベリア半島は711年からイスラム教徒の支配下に入り、キリスト教徒はわずかに半島北西隅を占めるにすぎなかったが、のちアストゥリアス、ナバラ、カタルニャなどの小王国を作り南方に勢力を伸ばし始めた。

11世紀前半になると後ウマイヤ朝が崩壊(1031年)、またカスティリア王国とアラゴン王国（アラゴン連合王国）が成立、しだいに強大となり12世紀にはトレド、サラゴサ、リスボンなどをキリスト教徒が征服して優位に

たった。13世紀にカスティリアはイスラムの重要拠点コルドバ、セビリアを奪い、同世紀後半にはイスラム教徒は半島南部のグラナダに孤立。1492年グラナダ占領でレコンキスタは終了した。800年にも及ぶこの戦争は中世イベリア半島史の主軸であり、以後のスペイン、ポルトガル両国の近代史にも大きな影を投げかけ、その多くの点で他の西欧諸国と異なる独自の社会と文化を形成する要因ともなった。

シトー会； ベネディクト会則を忠実に守る厳格な修道生活をめざして、1098年モレーム修道院長ロベールによりフランスのシトー(ディジョンの南約25km)に創設された修道会。（百科事典マイペディアより）



10/17

その3 シントラの文化的景観

リスボンから西へ約28km。夏の避暑地として深い緑に覆われた山中に王宮を中心としてペーナ宮殿、レガレイラ宮殿やムーアの城跡がある。かつてイギリスの詩人バイロンが「この世のエデン」と称した美しい景観は、世界遺産にも登録されている。大航海時代に昔からときおり歴史の表舞台に顔を見せ、現在に至っては国内でも有数の観光地になっている。

上の写真は王宮(Palácio Nacional de Sintra)のメインファサードです。

この王宮はイスラム教徒が残した建物をディニス王が居城とし、14世紀にはジョアン1世が増改築を行った。シンボルとなっている2本の煙突はこの時代に造られたものだ。

その後もマヌエル1世の時代に増築が行われ、ムデハル、ゴシック、マヌエル、ルネッサンスなど多彩な建築様式が見られる。

少なくとも15世紀初頭から19世紀後半にかけポルトガル王家が住み続けており、ポルトガル国内で最も保存状態の良い中世の王宮である。（地球の歩き方、ウキペディアより）

王宮の中を見学しました。27羽の白鳥がそれぞれ違ったポーズをとるマヌエル様式の「白鳥の間」や天井一面にカササギの絵が描かれた「カササギの間」、円錐形煙突の下の厨房他。





10/18

世界遺産 その4 バターリャ修道院

バターリャはポルトガル語で「戦い」という意味。
正式名は「勝利の聖母マリア修道院」。ブルゴーニュ朝のフェルナンド1世が亡くなると、アルジェバロータで1385年8月14日、王位継承をもくろむ隣国カスティリア王ファン1世は3万もの大軍を率いてポルトガルに攻め込んだ。

独立を守るためアヴィス朝の始祖となったジョアン1世は戦勝を聖母マリアに祈願し、奇跡的な勝利をとげる。
スペインに対してポルトガルの独立を守る歴史に残る戦いだった。

聖母マリアに感謝を捧げるためアルコバサの修道院を手本として1388年に始まった建設はアフォンソ・ドミンゲスをはじめとする何人かの建築家により16世紀初頭まで引き継がれた。

ポルトガル独立を象徴する修道院で、壮大かつ華麗な修道院はポルトガルのゴシック・マヌエル様式を代表する建築のひとつで1983年に世界遺産に登録された。(地球の歩き方他より)
写真はバターリャ修道院です。



11月19日

世界遺産 その5 コインブラ

政治のリスボン、商業のポルトに次ぐポルトガル第3の都市コインブラは文化の中心。丘の上の大学を中心に広がる、人口10万人ほどの小さな町だが、ポルトガルの歴史の中で果たした役割は大きい。多くの政治家や文化人たちを世に送ったコインブラ大学は1290年ディニス王によって創設された。

最初はリスボンにおかれていたが、その後コインブラに移ったりリスボンに戻ったりしながら、1537年コインブラに落ち着いた。ヨーロッパでもパリ、ボローニャ、サラマンカに並ぶ古い大学で、1911年にリスボン大学が設立されるまでは国内第一の学術の中心地であった。

2013年には、14世紀以降大学として使われている山の手のアルタ地区と、16～20世紀にキャンパスがおかれた下町のソフィア地区が世界遺産に登録された。

イネス・デ・カストロとペドロ王子の悲しき恋物語はここが舞台である。侍女と王子という身分の違いから結婚することのできなかったイネスは殺害され、その尽きることのない涙は涙の館の小さな泉から湧き出ているといわれる。

ペドロ王子とイネスの悲恋物語

父アフォンス4世の言いつけによりカスティーリャ王国のコンスタンサ姫と結婚したペドロ王子は、その侍女のイネス・デ・カストロと恋に落ちる。国王の怒りをかったふたりは引き離されるがコンスタンサが亡くなるとペドロはイネスを側室とし、3人の子供も生まれた。

しかしカスティーリャ王国の圧力をおそれた国王と家臣によって、イネスは殺されてしまう。やがて王位についたペドロ1世はイネスを正式な妻として教会に認めさせ、イネスの殺害にかかわったものは全て処刑したという。

現在ペドロ1世の遺骸は彼の遺言によりイネスの棺と一緒にアルコバサにあるアルコバサ修道院に（世界遺産その2で前出）安置されている。（地球の歩き方より）

写真は、コインブラ旧大学ラテン回廊と時計塔です。



世界遺産 その6 リスボンのジェロニモス修道院とベレンの塔

リスボン(ポルトガル語ではLisboa リシュボア)は、大西洋に注ぐテージョ川 (Spainではタホ川という) の河口から約12km上流の右岸に位置する、ヨーロッパ大陸最西端の首都。

ギリシャ神話のオデュッセウスによって築かれたという、ヨーロッパでも有数の美しさを誇るリスボンにふさわしい伝説をもつ。
年間を通して温暖で、「七つの丘の街」と呼ばれる起伏が激しい土地に約48万人、近郊を含めると約250万人が暮らす。

古代よりフェニキア人やカルタゴ人によって港として利用され、ローマ、イスラムの支配を経た後、1147年にアフォンソ1世がイスラム教徒から街を奪回し1260年にはアフォンソ3世がコインブラからリスボンに遷都。

15世紀から始まる大航海時代には、アジアや南米との交易によって莫大な富がもたらされ、ジェロニモス修道院やベレンの塔といった壮麗な建築物が造られた。(地球の歩き方より)

写真はベレンの塔です。先にご紹介した「発見のモニュメント」から600mほど離れたところにある建物でやはり50年前に立ち寄った時以来で懐かしかったです。

リスボンについてはまだご紹介したいことがありますが、とりあえず明日はスペイン北西部の世界遺産に登録されたサンチャゴ・デ・コンポステーラについてご紹介します。今回の旅の一番の目的地ですから。

その後、リスボン、サンチャゴや未紹介の街、見聞き、体験、感じたことなど順次ご紹介する予定です。

(自分の備忘録としても書きおきたいので。)



世界遺産 その7 サンチャゴ・デ・コンポステーラ (スペイン)

サンティアゴ・デ・コンポステーラ (Santiago de Compostela) はスペイン北西部、ガリシア州、ア・コルーニャ県の都市で、ガリシア州の州都。中世の面影を残す街、人口は約9万5千人で旧市街は1985年にUNESCO世界遺産に登録されており、また、エルサレム、バチカンと並ぶキリスト教三大巡礼地のひとつでもある。また巡礼路のうちスペイン国内の道は、「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」として世界でも珍しい「道の世界遺産」として1993年にユネスコの世界遺産に登録された。

紀伊山地の霊場と参詣道も「道の世界遺産」と知られており、和歌山県とガリシア州とは永続的な友好関係を確立するため、正式に両古道の姉妹道提携を1998年に締結した。

伝説によれば、イエスの十二使徒の一人聖ヤコブがエルサレムで殉教した後、その遺骸はガリシアまで運ばれて埋葬されたとされる。813年、現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラで、隠者ペラギウスは天使のお告げによりヤコブの墓があることを知らされ、星の光に導かれて司教と信者がヤコブの墓を発見したとされる。これを記念して墓の上に大聖堂が建てられた。大聖堂の建設はアルフォンソ6世の治世にディエゴ・ペラエス司教が推進して1075年に開始されます。11世紀にはヨーロッパ中から多くの巡礼者が集まり、最盛期の12世紀には年間50万人を数えた。

現在、サンティアゴ・デ・コンポステーラを目指す巡礼者は毎年数万人程度。その多くは徒歩で、自転車を使う人もいる。少数ながら中世のように馬やロバを使う人もいる。信仰のためだけでなく、観光やスポーツ、単なる目標達成のために歩く人もいる。車や鉄道、バスで移動することもできるが、巡礼路は線路や国道に沿っていない道も多い。また、サンティアゴ・デ・コンポステーラで証明書がもらえる人は、徒歩で100km以上、自転車で200km以上という条件がある。

巡礼路のシンボルはホタテ貝で、サンティアゴの方角を示すサインとして路のあちこちに見かけられる。巡礼者は巡礼の証としてホタテガイをぶら下げて歩く。巡礼者はさまざまな道をたどるが人気があるのは「フランスの道」である。ピレネー山脈からすべて歩くと780~900kmの距離で1日平均30km(早めの人) 歩くと約1か月かかる。

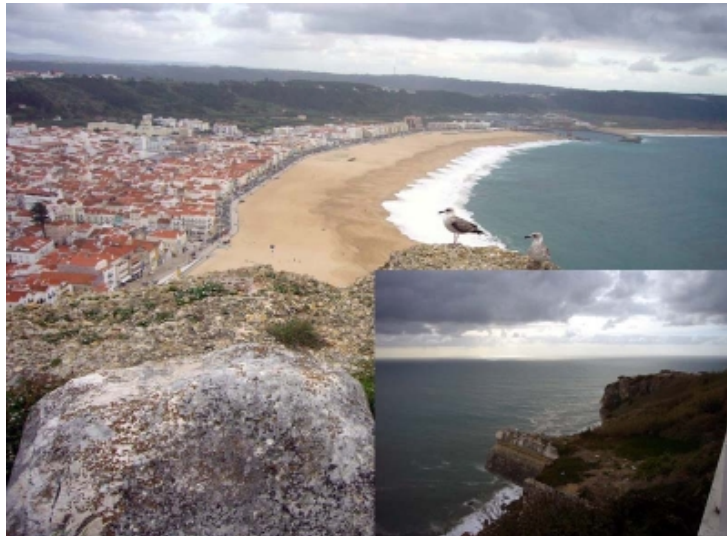
サンティアゴ・デ・コンポステーラのコンポステーラとは、「星の平原」という意味を持つ。サンティアゴは、聖ヤコブのスペイン語。フランス語ではサン・ジャック、英語ではジェイムスとなる。

2007年に「サン・ジャックへの道」という映画がありました。フランス映画でフランスからこの地を目指すことになる三兄弟。エリートだが家庭に問題を持つ長兄・ピエール、優秀な教師だが頑固で融通の利かないクララ、そして、社会生活不適合者にしてアル中のクロード。この三人に加え、一癖も二癖もある周囲が絡み、巡礼という道中を捉えた映画です。(ウキペディア・他より)

丁度私もウォーキングのイベントに参加し始めた時期で映画は久しぶりで、その時この映画を見ました。

主目的の大聖堂は外壁と内部の一部が修復中で工事は2017年までかかることが判っていましたが、それまで待てないということで

今回旅行しました。生憎、当日は雨が降ったり止んだりの肌寒い天気で、バスの駐車場から公園に寄り、大聖堂まで雨の中、傘をさしたり、たたんだり土産物屋が並ぶアーケードを通して、やっと大聖堂に到着。大聖堂内部を見学して外に出たら雨は上がっていたので写真も再度撮り直しできました。それが上の写真です。



11/22

くつぶやき> ナザレ (ポルトガル)

ナザレの町は長い砂浜に沿って広がるプライア地区、崖上のシティオ地区、東側の丘の上にあるペデルネイラ地区の3つから成り立っている。

ナザレという名は8世紀に西ゴート王ロドリゴがロマノという僧をお供にこの地までやってきたとき、彼が携えていたマリア像がはるかイスラエルのナザレのものだったことに由来する。

独特な習慣と服装で男性はチェックのシャツにフィッシャーマンセータと黒の帽子、既婚の女性は7枚重ねのスカートで知られる。また夏にはポルトガル国内はもとより、ヨーロッパ中から訪れるバカンス客で砂浜は埋め尽くされるとのこと。

写真はナザレ 崖上のシティオ地区からプライア地区の広い砂浜を見下ろす。そして合成の右下写真は目を右に移せば夕方の大西洋（夕日はないですが）の眺めです。



11/23

城壁に囲まれた町オビドス （ポルトガル）

城壁に囲まれたオビドスの人口は800人ほど、「谷間の真珠」と呼ばれる絵のように可愛らしい町で、その歴史はローマ時代に海からの敵の侵入を防ぐため、砦が築かれたことにさかのぼる。

イスラム教徒に征服された後、1148年にアフォンソ・エンリケスによってムーア人の支配が終わると、町の再建が行われた。
1282年にはオビドスを訪れすっかり魅了されてしまった王妃イサベルにディニス王が町を贈り、以後1834年までオビドスは代々の王妃の直轄地となった。

イスラム時代に造られたオビドスのメインゲートは敵の侵入を防ぐため二重のジグザグ構造になっており、アーチ形の通路の内側は18世紀のアズレージョで覆われている。

城壁の門を抜けて旧市街に入ると石畳の細い道にみやげもの屋やレストランなどが立ち並んでいる。
城壁には5ヶ所から上る階段があり城壁に沿って歩くと、全長約1.5km、40分位で一周できるとのこと。
そんな時間もないので写真右の階段から左方向に城壁に沿って約100m程、次の階段まで一番短い区間を家内がおそろおそろ歩いてくれた。



11/24

コルクの木

リスボンからサンチャゴに向かう高速道路の道中で日本から同行のベテラン女性添乗員が窓外に見える景色を見ながら色々な物&事について説明してくれた。その一つがコルク。「そのうちコルクの木が見えますよ。木の根元が剥がされてこげ茶色の保護剤が塗られているもので、リスボンより南の方に多いですが、ここでも時々見れますよ」との案内。

結局自分は見逃してわからなかったし、ここで写真を使うなんて考えもしなかったので写真はネットから借用しました。

ポルトガルのコルクは生産量、品質ともに世界一（55%以上）。
「コルク樫」という木(樫の木の種類)から採取される。
コルクは木の皮を砕いたもので断熱性・保温性・吸湿性・吸音性に大変優れ、その性質を利用して、古くは2000年以上前の

ギリシャ時代より樽などの保存容器として使用されてきた。

普通の木材との大きな違いは、「樹皮」を使うこと。
大体樹齢20年を過ぎたころから表面を剥がして、その皮を
乾燥・加工して使う。

また、原木を伐採せずに済むので、その後再生した樹皮から、
再びコルクを採ることができる。また樹皮を採取された
コルク樫は、樹皮再生のために通常の3～5倍ものCO2を
吸収する。皮を剥がれても9～10年で再生し、木を伐採する
ことなく何回も皮を剥ぐことができる。

コルク樫の樹齢は200年とも言われており、実に1本の木から
15～20回近く採取が可能。森を守りながら生産し続けられる
とても環境に優しくエコロジカルな素材。

コルクは古代ギリシャの時代より樽や瓶などの栓として利用され、
特にワインの歴史とは切り離せないもの。
ヨーロッパではとても身近な材料として、各種の生活用品・
工芸品に利用され続けてきた。バッグや帽子、アクセサリーなど
様々な製品が土産物屋に並んでいる。

コルクの木はスペイン南部のアンダルシア地方でも多く見られ、
コルク樫のどんぐりの実を食べさせてハモンセラーノ(有名な生ハム)
をつくるイベリコ豚を育てているとのこと。

これからゴルフに行ってきます。



10/25

ユーカリの木

サンチャゴに向かう高速道路の両側丘陵地帯の林には松の木が一番多く
あとはアカシアやユーカリが多いとのこと。
ユーカリはオーストラリア原産で600種類以上あり、コアラが食べる
のは40種類ぐらい。新芽だけ食べる。

ポルトガルのユーカリはコアラが食べない種類だそうです。
成長がとても早く、材木として注目される。70メートルを超える高さになるものから、5メートル程で枝分かれする種類もある。幹の太い物から細いものまでいろいろ。

ポルトガルでは製紙パルプ用チップとして広く植樹が行われている。
幹はどちらかというと細めで、あまり高い木は見当たらなかった。
まだ竹のように細いものも結構ある。

ユーカリの木は油分を多く含み、葉から取れる精油は殺菌作用や抗炎症作用、鎮痛・鎮静作用があるとされ、医薬品やアロマセラピーなどに用いられる。
また、健康茶等にも利用される。

オーストラリアでは自然発火による山火事が多いが、ユーカリがその一因である。ユーカリの葉はテルペンを放出するが、気温が高いとその量が多くなるので、夏期にはユーカリ林のテルペン濃度はかなり上昇する。

テルペンは引火性であるため、何かの原因で発火した場合、燃え広がり山火事になるのである。
樹皮が非常に燃えやすく、火がつくと幹から剥がれ落ちるので、幹の内側は燃えずに守られる。根に栄養をたくわえており、火の後も成長し続けることができ、新しい芽をつけることもできる。(ウキペディアより)
英語ではEucalyptus. 写真もウキペディアより



10/26

Caldo Verde (キャベツのスープ)

ポルトガルの代表的なスープの一つ。

日本の味噌汁のようなものだが、みその代わりにジャガイモを茹でてすりつぶしてピューレー状にしたものをブイヨンスープで薄めた飲み物でシーフードや野菜を入れて飲むが、一番ポピュラーなのはガリシアキャベツを千切りにして煮込んだものです。

ガリシアキャベツは日本で見るキャベツと違って正月の葉ボタンがそのまま上に伸びた感じで根がビューンと伸びていて上のほうに幅広い葉がついている。ポルトガル北西部やスペイン北部のガリシア地方で多く採れるようです。

コインブラで昼食で出たものですが、メインはエビと烏賊の串焼きでした。

今回のツアーで気が付いたのは、ポルトガルということで海外旅行に初めて来る人たちではなく他国を旅行した経験者が多く、食事のたびに、ほとんどの家族が記念にと料理の写真を撮っていること。私もその一人ですが、撮るのを忘れて慌てて食べかけを撮る場合もありましたが・・(笑)。



10/27
金平糖

昔、ポルトガル語が語源だと教わったコップ、タバコ、ボタン、パン、カップ、カルタなど今も日本語として使われていますが、金平糖もその一つです。南蛮菓子の一つで「砂糖菓子」を意味するポルトガル語「Confeito(コンフェイト)」が訛り「コンペイトー」となった。漢字の「金平糖」は「コンペイトー」の当て字です。

金平糖が日本に初めて渡来したのは1569年ポルトガルの宣教師ルイスフロイスが織田信長に献上したもので元禄の頃(1688-1704)大阪で作られ、文政の頃(1818-1830)に江戸に製法が伝わった。江戸中期には大名の茶菓子として用いられていたが明治時代には贈答用、来客用の高級菓子として一般家庭で用いられるようになった。(語源由来辞典より)

日本のものほど透明感がなく結晶化した砂糖にイボイボがついている感じ。リスボンあたりではほとんど見かけないが、コインブラ、ポルト、アソーレス諸島などで今も細々と作られているそうです。

添乗員さんが昔初めてポルトガルに来たとき、唐辛子など「ピリピリ辛いな」と言いますが唐辛子のことを「ピリピリ」とも言うことで、初めてポルトガル語からきた言葉だと知ったと言っていました。

写真はコインブラの菓子店で寫したもので、金平糖と(薄くて見にくいですが金平糖と日本語表示もあった)ポルトガル中どこでも見かけるエッグタルト(Pastel de Nata パステル・デ・ナタ)も売っていた。

リスボンの昼食でデザートにエッグタルトをいただいたので写真を合成してみました。



10/28
パエリア

パエリアとは、皆さまご存じのとおり米と肉、魚介類、野菜などの具材をオリーブオイルとサフランを加えて煮込んだスペイン料理です。

パエリアはスペイン語「Paella」からであるが、これは元々金属製の鍋をさす言葉で金属製の専用鍋を用いて調理することから米料理の名前となった。「Paella」はラテン語で「開いている」「蓋のない」を意味する「Pateo」、「浅い皿」を意味する「Patera」などが語源でカタロニア語で「Paella」となった。

日本でバレンシア風パエリアと言えばイカやエビが入った海鮮料理として知られているが、現地では必ずしも入れるわけではなく魚介類が入ったものは「Paella mixta」と呼ばれる。また元来のパエリアはうさぎの肉を使ったものであったと言われている。（語源由来辞典より）

今回の旅行で出てきた食事の中で一番おいしいと感じたのはこのパエリアでお腹一杯たべました。北スペインのサンチャゴです。

スペインは一般的には牛や、特に豚を多く食べるそうですが、北スペインからポルトガルは大西洋に面し、やはり漁業が盛んで、このほかにイワシの炭火焼き、タコのガリシア風、タコ雑炊、ほたて、タラ料理など魚介類が多くでした。

ところで世界で一番魚を食べている国はどこでしょうか？絶対人数ではなく全体の人口に占める割合で、ですが。

日本だと思いませんか。違うんです。1位はノルウェー、そして2位がポルトガル、3位が日本だそうです。

写真美味しそうに撮れてるでしょ。





10/29

お茶について

添乗員さんから聞いたこぼれ話です。

3000年前、中国で白湯を飲んでいる時、頭上の木の葉が舞い落ちてきて茶碗に入ったがそのまま気にせず飲んだら風味豊かですっきりしたので葉を入れて飲む習慣ができ、この葉を茶と呼んだ。

中国はこの葉をチャとして広く輸出し、主に陸続きのモンゴル、インド、中近東、近隣の韓国、日本、東南アジアなどそしてロシアにも直接取引した。ヨーロッパとの取引は15世紀になるとポルトガル人がインドのゴアを拠点として南蛮貿易を進め、初めて中国と取引し、この茶葉をヨーロッパで唯一中国語に近い言葉でCHA(シャと発音)と呼んだ。

そしてヨーロッパの貴族や王様に紹介するために南蛮船で運ばれた茶葉をリスボンの港で積み替えヨーロッパ各地に輸出することになり、いろんな港を経由して目的の港に届けるのに、茶葉を茶箱にいれ外側にTransport（港から港へ）を意味する頭文字のTと記してフランスのルアーブル、ドイツのブレーメン、イギリスのサザンプトン、オランダのロッテルダム、ベルギーのアントワープなどへ輸出した。受け取った人たちはTと書かれたものがその飲み物だと思って茶葉をティー (or テー) と呼んだ。

現在、中国からトルコまでがチャあるいはチャイでその先ギリシャからはティーと呼んでいる。スペインもテーと呼び同じ大航海時代にあって中国と直接取引が行われず、ポルトガルを経由して入ってきたのだ。

その国のお茶の呼び方で当時中国と直接取引したのか、ポルトガル経由で輸入されたのかが判ることになります。

写真はポルトガルでもっともポピュラーなデザートのパウディング・フランです。
(Pudim Fran パウディング・フラン) 一休みしてお茶でもどうぞ かな。





10/30

「消臭力」のミゲル君

皆さんご記憶がある方もいらっしゃると思いますが
消臭芳香剤「消臭力」のCMが2011年に民放で流され、
「ララララ・・・ララ、ショウシュウリキ」と
高音の美声で一躍有名になったミゲル君と
その背景のサン・ペドロ・デ・アルカンタラ展望台です。

下には色あせたオレンジ色の屋根の波が、正面には
サン・ジョルジェ城が見渡せるポイントで撮影されました。
ミゲル君はこれ以降も日本人と次々にユニットを組んで
「消臭力」のCMに出演しているようですが
最近ではCM放映ありませんね。

ところで、七つの丘の街、リスボンの低い所と高い所とを
短距離で結ぶケーブルカーが3路線で運行されていますが、
特に重宝するのがこのグロリア線であれっ?と思うほど
短いけれど(5分程) 横にある急な階段を歩いて登るのは
やっぱりきつそうです。
そして丘の上に着くとすぐにこの展望台があります。



10/31

ジャカランダ

中南米原産の低木から高木で2mから30mぐらい。
ノウゼンカズラ科に属する。種類は50種類近くあるようです。
花の色は青や青紫色ですが変種に白色も。

私がこの花を知ったのは1973年から2年間仕事で東アフリカ
3国(ケニア。ウガンダ、タンザニア)に滞在していた時で
ナイロビで、11月に満開の桜のような感じでした。
ただし花の色は薄い青紫色でとても印象に残っています。
ジャカランダの名前をこの時覚えました。

そして今回リスボンで季節はずれのジャカランダが所々で
ポツポツと咲いているのを見ました。ナイロビで見たのとは
種類が違いますが。

リスボンでは普通5～6月が最盛期だそうです。

今回初めてネットで調べたら日本にもあちこちにあるんですね。
若い苗木でも売っているし、今までずっと(50年)日本には
ないと思っていましたので恥ずかしい次第。

今日は天気が悪いですけどこれから芝刈りに行ってきます。
あとらん太さん、ふーちゃんさんコメントありがとうございました。
亜蘭さんはじめまして。



11/1
天正遣欧少年使節団

織田信長の時代に南蛮貿易でキリスト教を歓迎した信長は九州の
キリシタン大名の名代として1582年（天正10年）2月にローマへ
4名の少年(13-14才)を中心とした使節団を派遣した。

南蛮貿易で特に彼を喜ばせたのが鉄砲と奴隷貿易のはしりとなった
アフリカの黒人をプレゼントされたことでその黒人一人を側に置いて
いたとの記述が残っている。

さて一行を乗せた船はマラッカやインドのゴアを経由して
ポルトガルリスボンに2年半後1584年8月に到着、
その後スペインやイタリア各地で歓待を受けローマに到着。
教皇に謁見しリスボンまで戻って1586年にまたリスボンで
出航して帰路についた。苦難の航海の末1590年に長崎に
無事帰還した。実に8年の年月が経っていた。
出港した時は少年だった若者が立派な青年になっていた。

使節団によってヨーロッパの人々に日本の存在が知られる様
になり、彼らの持ち帰ったグーテンベルク印刷機によって
日本語書物の活版印刷が初めて行われキリシタン版と呼ばれる。

しかし一行が帰還した時は既に秀吉の時代になっていて、ポルトガル
が南蛮貿易で強引に布教活動を進めたため、キリスト教の抑圧を
目指した秀吉から排斥され、逆に宗教を前面に出さなかった
オランダと中国との取引を進め、御朱印を与えられた両国が
御朱印船として出入りするようになった。(ウキペディア、他より)

リスボンに着いて1ヶ月ほど滞在したイエズス会のサン・ロケ教会

およびシントラの宮殿が一行の宿になったようです。

フィリグリーナの船（つづき）

10月14日にご紹介した金細工ですが実は店頭のものと同じ型の小型と超小型の船を50年前に買って我が家にまだ残っていたんです。(写真)

家内が今回の旅行で思い出してそういえば古くなって捨てようか
と
思っていたと。「あなたが学生時代に買ったんならそんな
高いものは買えないはず」と確かにその通りと思いますが、
果たしてどのくらいの価値があるのか金そのものの重さは
そんなにないと思いますが、もしかしたらそのうちに家内は
断舎利で売りにいくかも。(ないしょ(笑))



11/2

リスボンの街を乗り物体験で

市内の世界文化遺産を皆で見学し昼食後は自由行動になっていた。
でも独自に美術館へ行ったのは1家族だけで、残り全員行くところが
定まっておらず、結局添乗員さんが案を出してくれて、ホテルに
戻るまで一緒に道案内してくれることに。

バス、市電、ケーブルカー、地下鉄と1日どれでも乗り放題の
カード(6.5€)を買って乗り物体験することに決まった。

最初、市電の12番線に乗る。これは、市内アルファマ地区を
約25分くらいで1周してまた元の場所に戻って来るとい
う、レトロな乗り物を体験するにはもってこいの路線でした。(写真)

次はグロリア線のケーブルカーで前出のミゲル君の丘まで往復。
そして、最後ホテルまで地下鉄に乗って帰るというものでした。

ここで変な話ですが、リスボンは他の大都市に比べれば治安は
いい方。それでもスリが結構いるので、特に市電に乗る場合は

気を付けてくださいと 添乗員さんから注意があった。

午前中、自分たちのバスが迎えに来るのを街の広場横で
皆で待っていると現地女性2人が近寄ってきたのを見て、
添乗員さんが彼女たちはスリですから気を付けてくださいと。

幸い事件にはなりませんでした。午後12番線市電の停留所に
皆で並んで待っていて手前で客を下した空の市電が到着。
先頭に並んでいた我々一行が乗りはじめたら一人の現地女性が
乗降ステップ近くまで横から割り込んできてすぐ後ろに
くっついたので、我々の仲間の女性が「横入りしちゃダメよ」と、
ばかりに手で押し戻したら仲間とみられる処へ引き下がって行った。
やはり添乗員さんはあの人たちはスリですよ、と。

後で皆がどうしてスリとわかったんですかと尋ねたら
何回も来てるので感で見分けられると。そういえば
確かに目つきが他の人たちと違い、すごく鋭かった気が
しました。「さすがベテランの添乗員さん」と変なところで
感心した次第です。因みに28番線の市電が一番危ないとのこと。



11/3

バターリャ修道院の衛兵の交代

バターリャ修道院を見学中、無名戦士の墓を守る衛兵の交代に
たまたま出会ったのでこの珍しい光景を動画でとりました。

1分ほどの動画ですが雰囲気は伝わるとい、自分のHPに仮設置
しましたので興味おありの方はご笑覧いただければと思います。

URL; <http://www.dededen.mikosi.com/>





11/4

アンネフランクの家

リスボンからの帰りは往路と同じKLMでアムステルダムでの乗り継ぎ待ち時間も往路と同じく6時間近くになるため、添乗員さんに申し出て最終的に私と家内、それに若い友達同士の女性2人だけが2時間の車による市内観光のオプションツアーに参加することになった。

他の人達は既にアムステルダム観光は済ませていて興味がなかったようです。

料金は50€/人、少人数のためタクシー（と言ってもJTBが委託した運転手で英語で案内が出来、観光ルートも決まっていた）になった。

空港から一旦郊外に出て旧農家でチーズを加工している場所に案内され、次に昔の水車小屋の前（現在は普通の人に住んでいて水車は動いていない）でも写真を取り、市内中心部に戻って主目的だった運河沿いのアンネフランクの建物の外観を撮影。

（9/16の日記でアンネのバラをご紹介しましたがその関連で一度外観くらい見ておきたかった。ただし、もともと家の中に入る予定はなかったし、写真のように行列を作って入場を待つほどの人気でした。）そのほか、運河沿いの景色など写真におさめ丁度2時間で空港に戻れた。
（市内中心から空港迄約20分と近かった）

今回のポルトガルと北スペインのサンチャゴの旅行記はひとまずこれでおしまいです。
また何か書きたくなるかもしれませんが・・・。

来年の年賀状の写真は今回の旅行から選ぼうと思っています。
HPにも近いうちに自分史の追加として写真を載せる予定です。